

平成 22 年 4 月 30 日現在

研究種目： 基盤研究(C)
研究期間： 2006～2009
課題番号： 18520185
研究課題名（和文） 18 世紀イギリスの個人の体験とその共有についての文学的文化史的研究
研究課題名（英文） Private experience and sharing it in eighteenth-century Britain
研究代表者
鈴木 実佳（SUZUKI MIKA）
静岡大学・人文学部・教授
研究者番号： 40297768

研究成果の概要（和文）：

出版界が進取の気性に富み、印刷物の普及や知識・情報の伝達の迅速化と広範化の進展がみられた 18 世紀英国に注目し、書物を刊行した作家ばかりでなく、書簡や日記などの記録を残した人々について、「書く」あるいは「読む」ということが果たした役割を考察した。そこにみられるのは個人的感情・感性・感受性・観察・考察と、それを他者と共有しようとする方策であり、個別性や内密性の重視と、情報の伝達による他者との共同体の一体感希求が並行する。

研究成果の概要（英文）：

This study has its focus on the roles of writing and text that intermedate individuals' experience in the age of commercialization and the rise of printing industry and the novel in Britain. Referring to records in manuscript as well as published materials, it has revealed a dual emphasis on the enclosure of private feelings, sentiments and experience and their circulation and publication.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	500,000	0	500,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総計	2,800,000	690,000	3,490,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：英米文学

1. 研究開始当初の背景

この研究は、18 世紀英国の書簡体小説・風刺・感傷小説や、感受性・人間関係の構築の仕方への関心を背景としている。それを研究するにあたり、文学者とそのパトロンに関係

を探るようになり、個別の作品や資料にいきついた。文学者として関心をもったセアラ・フィールディングが教育書を献じている女性の娘が、出版活動はしていないが、手紙や自分の慈善活動の記録や、家の運営記録を残

しており、それも非常に数多く組織的に保存されていることがわかった。資料の中には、援助を請う人々が、自らのたどった人生を語り、いかに自分が慈善の対象としてふさわしいものであるかということに訴える夥しい数の手紙があり、出版されたもの以外の資料も研究対象とするようになった。そして、18世紀に盛んに行われた組織的あるいは個人的慈善運動への関心にもつながった。

2. 研究の目的

この研究の目的は、個人的感情・感性・観察・考察と、それを他者と共有したいと願う欲求の間をつなぐものとしての書かれたもの（手紙や個人の記録、そして出版物）を考察することである。男性女性に関わらず、この時期の人々は、感受性を非常に意識し、自分や他人のたどってきた道を振り返り記録する、人生の物語を語ることによって、他者との繋がりを見出したり構築していったりしようと努める。この傾向を、感受性と社交性、感受性と同情や共感を軸にして、文学の世界と慈善の場でとらえることも目的とする。この時期に特徴的な、小説の興隆、出版市場の拡大、慈善活動の組織化とともに、膨大な数の個人の間での手紙の遣り取り、人生を記録することへの執着を、広い文化的文脈に置いて理解することに努める。個と社会、文学と現実の相互関係を探る研究でもある。

3. 研究の方法

イギリス18世紀の人々が残している記録・書物を使い、個人の体験・感情や日常生活の記録と、自己の立場の把握、人間関係の構築を探る。

重点的に考察していく資料は、スペンサー伯爵夫人 (Margaret Georgiana, Countess Spencer, 1737-1814) が残した手紙・日記・メモ・記録である。その大部分が、現在大英図書館所蔵になっている Althorp Papers に収められているので、その閲覧を必要とした。その母親であるポインツ夫人 (Mrs Poyntz) と彼女、そして彼女とその娘であるデヴォンシャー公爵夫人 (Georgiana, Duchess of Devonshire, 1757-1806) の3代にわたる人物それぞれの自己把握のしかたや、義務感、文壇・文人・芸術家との関係、政治・政治家との関係、出版・ジャーナリストとの関係などを考察する。デヴォンシャー公爵夫人の資料は、大部分が Chatsworth House 所蔵である。彼女については、Amanda Foreman が伝記を出版しており (*Georgiana, Duchess of Devonshire*, 1998)、非常に参考になるが、この伝記では、彼女が書いたと言われる2点

の小説や、母親スペンサー伯爵夫人との間、あるいは親密で複雑な関係をもった友人との間の手紙のやり取りについて彼女がどんな考えをもっていたのかということについては重点がおかれていないので、手稿資料にあたって、それについて検討した。

貴族の女性の名前が目立つが、貴族や文化的エリートだけに絞った研究ではない。スペンサーに手紙を書いていた人々は多岐にわたり、特に困窮する人々からの手紙が資料の中でも際立っている。

4. 研究成果

この研究期間に行った研究全体を総括する成果は未だ出来上がっていないが、その中の部分を成すものは発表したもので、それについて以下に概略を記す。(1)は主たるまとまった成果出版物、(2)は主たる関心の考察に貢献する研究の成果出版物、(3)は、新たに得た視点の口頭発表とそれに関連する成果出版物、(4)は準備途上の論文についてとなっている。

- (1) 18世紀半ばの文学・文化を主題にした書物を出版することを優先して研究を行い、それを達成したのが、この研究期間における最大の作業であり、成果だった。この書物は、ソシアビリティや感受性、情報や思索の内容の共有、人間の互いの理解に非常な関心を示し、それを書物の形にして表現することに取り組み続けた18世紀半ばの作家セアラ・フィールディング

(1710-1768) を題材にした。18世紀イギリスの文化的風土と、それが可能にした活発な知的活動の発露としての文学上の試みについて考察するにあたって、小説をはじめとする散文で斬新な試みを繰り返し行っていた彼女は、格好の材料を与えてくれる。印刷物の普及や知識・情報の伝達の迅速化と広範化の進展がみられるなかで、彼女は、出版物の受け手となる人々の動向をつかまえようとする敏感なアンテナを張り巡らす作家としての意思と、一方では大衆に迎合しまいという決意を常に強く意識していた。彼女が試みた形式としては、感傷小説、書簡体式エッセイ集、学校物語、他作家の作品への注釈物語、歴史上の人物の一人称での語り、演劇仕立ての物語、ギリシャ古典の翻訳などがある。テーマについては、友情、感受性、女子教育、結婚、離婚、作者と読者の関係、共感、慈善などが挙げられる。慎重で、危ういことには手を出さず、規制を内化してしまっているかのよう捉え

られることの多い18世紀半ばの女性作家であるが、フィールディングの場合、出版という手段を巧みに使って、知的エネルギーを発揮する場をつくり、物語に耳を傾けることや読書の体験が人生においてどのような役割を果たすことが望まれるのかということを書いてきた。

- (2) 発表論文などとしては挙げていないが、翻訳書『茶の帝国』(知泉書館、2007)は、茶樹をめぐる歴史を主軸にする書物であり、筆者のマクファーレンがアッサムのプランテーションで幼少時期を過ごしているという事情から、個人の体験と想いが、明晰な学術的分析に織りこまれ、歴史を解明する物語を形成するという形をとっており、ナラティブと作者と読者の関係を考える良い材料になった。

他に、医学関係の人名事典で、日本の医療制度が新たな時代を迎えたころに活躍した二人の女性、吉岡弥生、荻野吟子の項目を執筆するため、伝記や伝記的小説を読む機会を得て、彼女たちの生涯について執筆し、学ぶことが多かった(‘OGINO, Ginko’ and ‘YOSHIOKA, Yayoi’ in *Dictionary of Medical Biography*, ed. William F. Bynum and Helen Bynum (Westport, CT: Greenwood, 2006))。

また、時代も国も分野も違うが、19世紀の日本のコレラをめぐる文献や新聞記事資料をもとにして、共同執筆の論文を発表した。ここでは、国家の政策と養生書の処方と新聞記事で取り上げられるような個々人の行動の記録を考察し、近代日本の個と社会をめぐる視点から検討した。

- (3) 日本オースティン協会での発表では、18世紀の小説によくみられる、個人が語る自分の過去の物語に執着するナラティブの傾向をジェイン・オースティン(1775-1817)がどう受け継ぎ、発展させたかを分析した。彼女は、その傾向を大いに尊重しながら、主観的な語りを警戒し、それを揶揄して、個人の体験を語ること、そしてそれを受け入れることについてコメントを加え、語りの技術を発展させていったという主旨の口頭発表にした。これを拡充して論文として発表した。論文では、オースティンがナラティブの技術に関心を持ち注意を払いながら創りあげていった小説の世界について、一人称で過去を語ることの限界は大いに意識しているにも拘わらず、大事な場面では、個人の過去についての物語

を使う点を焦点にした。人物に回想させて、過去を語らせ、個人の視点から過去を整理して、その物語の中で起きている事件を知らせること、語っている個人による過去の事件に関する評価を知らせること、語り方により、語っているまさにその人物を読者に知らせることという機能を担う。そしてさらに重要なのは、過去を語るのは登場人物であって、物語全体を仕切っているナレーターではないという物語の構造をこれにより維持していることだ。つまり、ナレーターの役割を限定するための装置である。ナレーターは、時の流れの中で目の前に展開される区切られた部分の世界しか描写しない。過去を語るのを登場人物に任せることで、このナレーターは、全知ではないというポーズをとることができ、明々白々な意見・見解の押し付けをすることなく、微妙な解釈の余地を残すことができる。

また、静岡大学哲学会における発表では、オースティンの個人が語る物語への執着と懐疑について述べたが、その際には、オースティンが提供する癒しと幸福感に重点を移して、これも論文にした。

慈善と文学のテーマについて英語での論文発表は、2009年1月のBritish Society for Eighteenth-Century Studies Annual Conferenceにおいて行うことができた。

この発表に関連して、リサーチをスペンサーの娘のデヴォンシャー公爵夫人に広げ、彼女がフィクションを出版したり、選挙活動に参加するなど、パブリックな場に出ていることに注目し、多くの手紙を書いたものの出版は行わなかった母親との対比を通して、貴族女性の活動について考察し、その成果をジョンソン協会シンポジウムでの発表に利用した。シンポジウムは、デヴォンシャー公爵夫人の公私の活動を広く扱った。その一部を成す発表は、母娘の手紙や出版物にかんする考え方の類似と相違をテーマにした。シンポジウムでは、デヴォンシャー公爵夫人の政治の場での活動や風刺でのとりあげられかた、彼女が作者であるという合意がある小説についてなどが論じられたので、まさに私的な記録と公の場での活動や出版物にかんして考える良い機会だった。

- (4) 18世紀の思想・文学・文化・ジェンダーに関する研究の中でも、特に感受性(sensibility)の研究書や論文を意識

して集めて読み、スペンサー伯爵夫人周辺の記録について、慈善関係1本、デヴォンシャー公爵夫人との対比1本の論文として発表するための準備を進めた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 鈴木実佳、「ジェイン・オースティンと幸福感」『文化と哲学』査読有 25 (2008): 71-90.
- ② 鈴木実佳、「人生を語る人々 —— ‘A short account of myself, I believe, will be necessary’」『ジェイン・オースティン研究』査読有 *The Journal of the Jane Austen Society of Japan* 2(2008): 91-114.
- ③ Mika Suzuki, ‘Her fairest Virtues fly from public Sight’?: Female Writers on Education’ 『静岡大学人文学部人文論集』57-2(2006): 107-29.

[学会発表] (計5件)

- ① 鈴木実佳、「セアラ・フィールディングと物語の聴き手 (The Cry?)」十八世紀英文学研究会 (2010年3月13日) 同志社大学.
- ② 鈴木実佳、「貴族女性のペン: ‘the spreading Oak’ and ‘the weak woodbine hanging upon it’」シンポジウム (向井秀忠、一ノ谷清美、鈴木実佳、梅垣千尋「ミス・スペンサーからレディ・ジョージアナ、そしてデヴォンシャー公爵夫人へ —— ジョージアナと家族、政治、表象、小説」日本ジョンソン協会第42回大会 (2009年6月1日)、アルカディア市ヶ谷私学会館).
- ③ Mika Suzuki, “Recording and sharing experience: ‘the Medicine of Life’”, The British Society for Eighteenth-Century Studies 38th Annual Conference 5-8th January 2009, St Hugh’s College, Oxford (2009年1月7日).
- ④ 鈴木実佳、「個人が語る物語への執着と懐疑: Jane Austen and an account of oneself」静岡大学哲学会 (2007年11月3日).
- ⑤ 鈴木実佳、「人生を語る人々—‘A short account of myself, I believe, will be necessary’」日本オースティン協会第一回大会 (2007年6月30日) 明治学院大学).

[図書] (計2件)

- ① 鈴木実佳、『セアラ・フィールディングと18世紀流読書術』(東京: 知泉書館、2008) 245頁.
- ② Akihito Suzuki and Mika Suzuki, ‘Cholera, consumer and citizenship: modernisations of medicine in Japan’, in *The Development of Modern Medicine in Non-Western Countries*, ed. Hormoz Ebrahimnejad (New York and London: Routledge, 2008): 184-203.

[その他]

ホームページ等

- ① http://web.thn.jp/mikasuzuki/
- ② 鈴木実佳 平成14-17年度科学研究費研究成果報告書 「18世紀英国女性にみられる<弱者>との関係の文化史的研究 — 慈善と母子関係を中心に」(平成18年3月) 104pp.
- ③ 鈴木実佳 平成15-17年度科学研究費研究成果報告書 「生命ケアの比較文化論的研究とその結果に基づく情報の集積と発信」(平成18年3月) 393pp. 鈴木実佳、「湯治都市バースの鉱泉とケア」200-206.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 実佳 (SUZUKI MIKA)
静岡大学・人文学部・教授
研究者番号: 40297768

(2) 研究分担者 該当なし

(3) 連携研究者 該当者なし